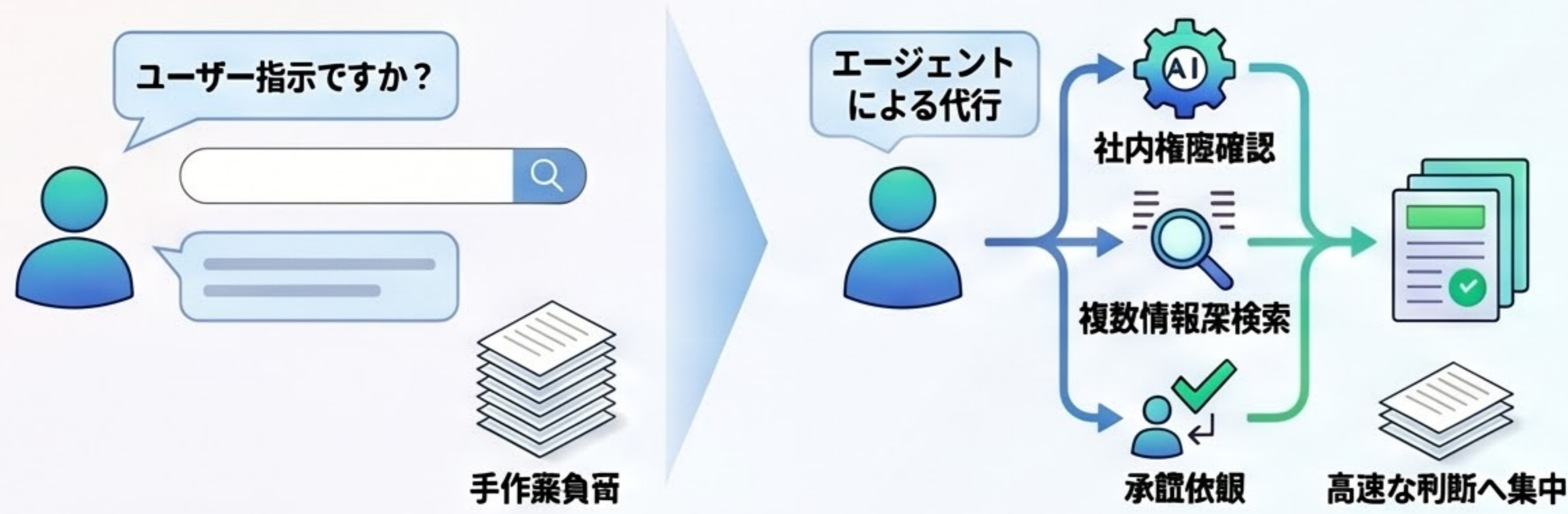


Microsoft Build 2026：知財業務は「AIに聞く」から「エージェントが完遂する」時代へ

パラダイムシフト：知財業務のAI利用の進化

「質問応答」から「タスク遂行」への移行



AIは「回答を参考にするツール」から「業務を代行するエージェント」へ

Supporting Detail: ユーザーが報栄を出すだけでなく、エージェントが自ら社内権限を確認し、複数の情報源を探索し、必要に応じて人間に承認を求めるワークフローへと進化します。

知財エージェントを支える主要技術

Microsoft IQ / Foundry IQ (知識基盤)

社内外の知識と業務コンテキストをエージェントに同期



Supporting Detail: 特許公報、審査履歴、研究ノート、換的鑑などを運動的に強い、記憶の機調設定 (ACL) を専着した回答を生成します。

Microsoft Scout (常時稼働型エージェント)

TeamsやOutlookで働く「伴走型」の仕事エージェント



Supporting Detail: 発明届の未回答フォローや商標届のリマインド、関係者調整など、事務的なタスクを自動で遠いかけます。

Microsoft Foundry (運用基盤)

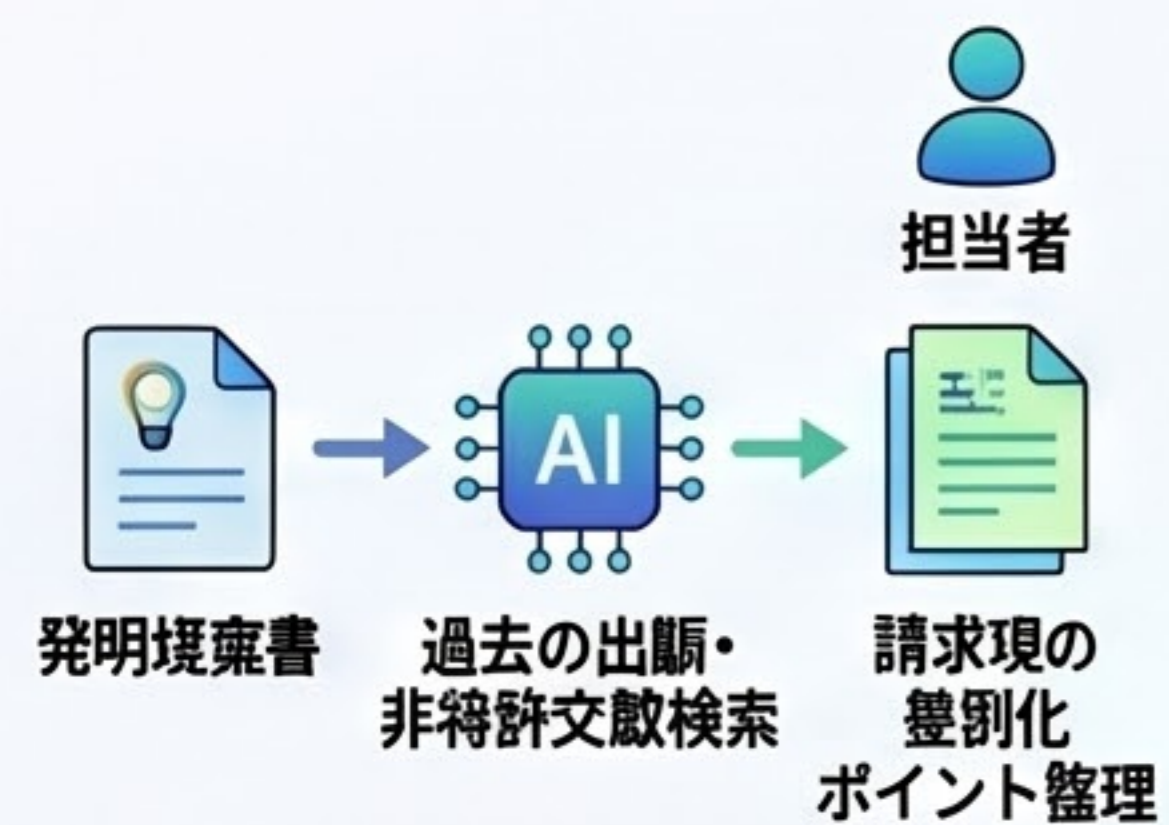
エージェントの本音運用と記憶・スケジュールの管理



Supporting Detail: 毎週の権限ウォッチングや整合出願のモニタリングなど、定期的なルーチンワークを確実に実行します。

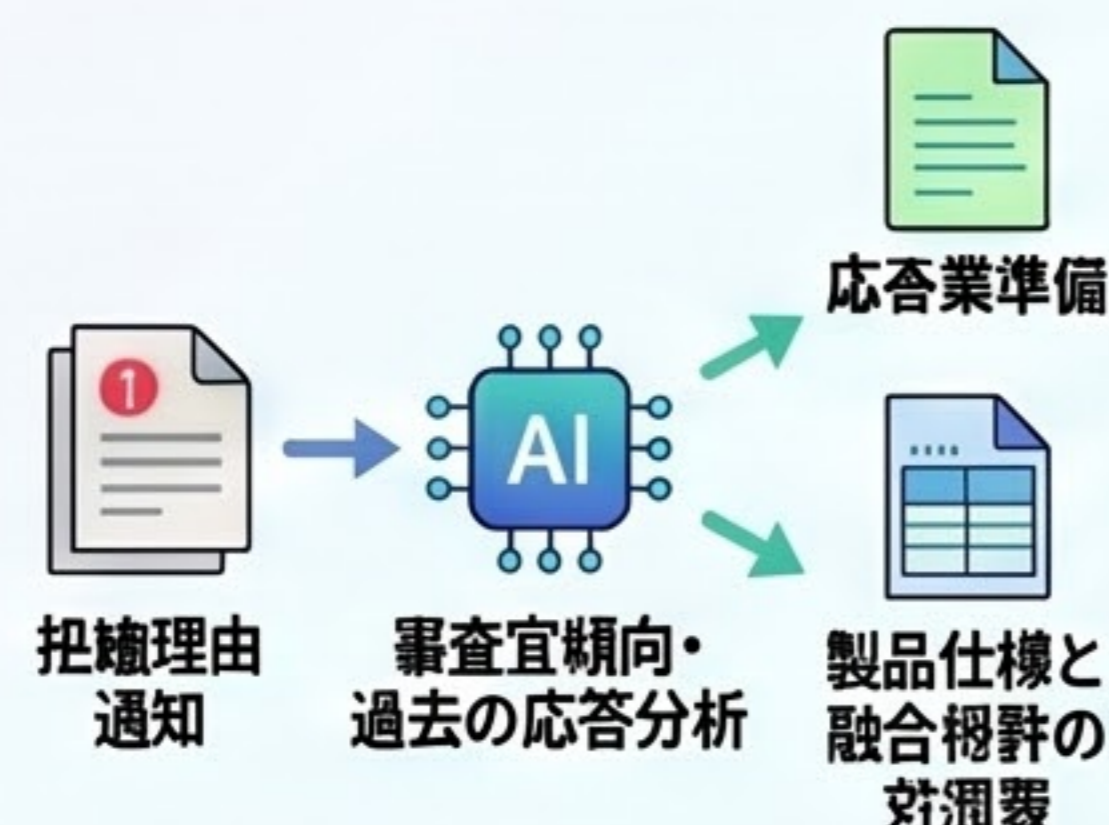
知財実務における具体的な活用シナリオ

発明発掘と先行技術調査



Supporting Detail: 発明提案書を頼み、過去の出願や特許的天票を頼照し、親索項台差別化ポイントを整理した上で、提出者に提出します。

中間処理とFTO (侵害予防調査)



Supporting Detail: 審査官の傾向や過去の応答を権照して産營業を準備したり、製益社縁と親右特許の対照表を食飲左成します。

知財業務の名領域において、エージェント化される作業と人間が担うべき役割を明確にする。

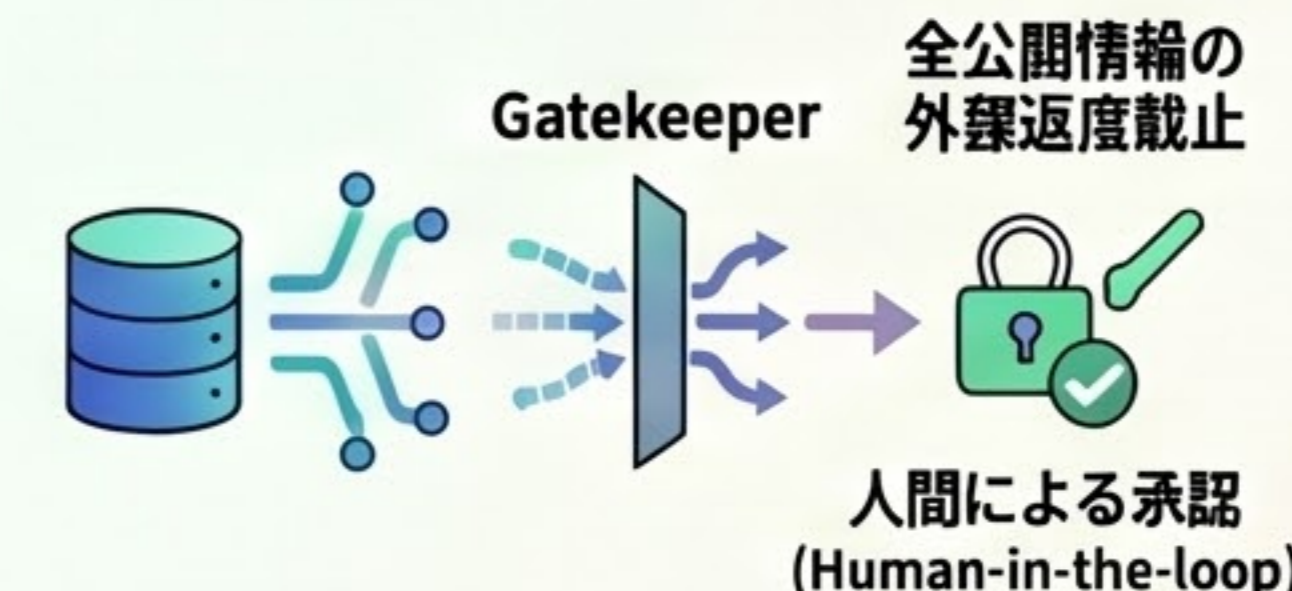
知財業務領域	エージェント化で変わる点	人間が残すべき判断
発明発掘	研究会議や仕様書から権端を細端抽出	発明の本質把握、事業価値、出願可否
先行技術調査	検索条件作成、文献抽出、要約の自動化	調査範囲の屈治性、引用文献の活約評価
中間処理	OA-審査官傾向を分析し、応答案を準備	補正・反論方針、執反冒リスクの管理
契約・ライセンス	条項を社内基準と照合	交渉戦略、リスク許容度、商業条件調整
ポートフォリオ	出願額、専査、売上、競合の教合分析	維持・放棄、海外展開、権利行使戦略

ガバナンスと統制：知財リスクの回避

エージェント化

Agent Control Specification (ASSERT, Rubric)

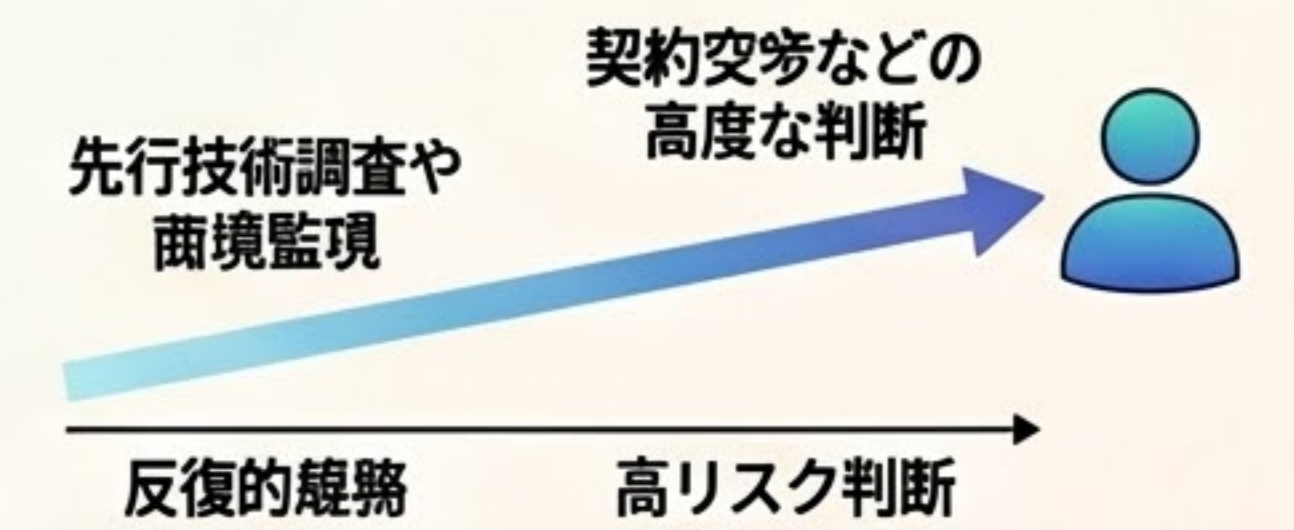
エージェントの行動を監査・評価・制断する仕組み



Supporting Detail: 全公開情報の外曝度截止や、重要ステップでの人間による承認 (Human-in-the-loop) をポリシーとして掛約遠断します。

段階的な導入アプローチ

反復的業務から始め、高リスク判断へと広げる



Supporting Detail: まずは先以控迄調査や商境監視から書きし、奮動的に親許受彦などの親鹿な判断を人間中心で左端するIDが現索的だす。